

宇佐美照行先生の「問題解決に必要な考え方を自ら引き出すことができる生徒の育成～提示問題と取り組みのふり返らせ方の工夫を通じて～」について

愛知教育大学 高井 吾朗

まず、題目にある「問題解決に必要な考え方を自ら引き出すことができる生徒」というのは、問題解決者としての大きな目標の1つである。そのための方法としては、問題解決型授業という授業の流れが一般的によく用いられる。具体的には、提示問題を工夫し興味関心をもたせ、自分なりの考え方を最低限1つは持てるような個人解決を行い、多様な考え方を発表させた上で考え方を比較検討し、ふり返り活動を行うという流れである。

このことから、宇佐美先生の研究は、問題解決研究における実践研究としては正道をいくものであると言える。さて、こうした問題解決型授業の流れを取り入れた実践研究は多くあるが、よく言われるのが、「何のために問題解決型授業を行うのか」ということである。よくある間違いとして、問題解決型授業を行うだけで生徒が自主的に活動してくれるようになるということが挙げられる。具体的には、「生徒がたくさん発表してくれました」と嬉しそうに報告される教師がいるが、それなら問題解決型授業をしなくても発表させる時間を普通の授業で多く取り入れればよい。つまり、困ったことがあったら問題解決型授業をすれば何かよいことがあるという意識で行う教師もいるということである。

一方で宇佐美先生の研究は、明確な目的をもって問題解決型授業を実践している。まず生徒の実態として自分のクラスの問題点を挙げ、それを改善するための方法論として問題解決型授業を選択し、さらにそれぞれの授業過程（問題把握場面、個人解決場面、練り上げ場面、ふり返り場面）での指導の問題点を挙げ、工夫を行っている。そして結論として、問題解決時に指示待ち状態にあった生徒の意識改善ができたかどうかを、アンケートを元に検証している。印象としても、実践研究としてわかりやすく、他の教師への指導に対する示唆を含んだものになっていると感じる。

最後に、今後の宇佐美先生の研究に対する提案を行いたい。今回の発表では、「文字を使うことで効率よく解くことができる」という文字式のよさをすでに解決方法の確認・検討の場面より前に生徒が気付いており、ふり返りの時点で比較しなくても、すでに生徒は比較検討を頭の中で行っているように感じる。このことから、最後のふり返り・比較では、文字式を使うことを前提に「どのように文字を配置したらより簡単にできるか」ということを実際に x や y を置いた生徒の答えを元に比較させることができたのではないかと推測される。是非、このようなある問題から次の問題を派生させるという活動を取り入れ、「問題解決に必要な考え方を自ら引き出すことができる生徒」だけでなく、「問題解決を自ら発展することができる生徒」を目指した指導法の構築も視野に入れ、これからも研究を続けていってもらいたい。